

J2.993:3

3 of 3

* KOGEN, Vol. 9, 1945

67/14

C

短歌誌

高原

第九號

故中村郁子氏

東津
久仁

高原

九号

追悼號

目次

六氏一首鈔

人生及自然の幽寂
泊良彦

絶詠

故中村郁子

糸井野菊・柏木天浪・神部孝子・中川末子・中村ます子
大場眞弓・滿永秋津・三原かつの・越後桂子・濱田ハナ子
春野陽子・足田桂子・岩月靜惠・眞杉茂・村上靜子
杉浦 俊・田中葦城・阿部た子・林田美都枝・和多田ゑん
田名ともゑ・永瀬 勇・貴家しづ子・佐藤不二子・加藤けいゑ
仁熊登美子・渡邊あい子・村上正男・綾織謙介・豊福昌範
山内曾六・岩本志滿子・吉田きみ子・矢尾嘉夫・他拾數氏

中村郁子氏を悼む
柏木天浪

郁子氏を悼む
糸井野菊

憶中村郁子様
中川末子

追憶
中村ます子

中村郁子氏を憶ふ
泊良彦

追悼歌並追悼詞

○高 原 詠 草 一 十 五 氏

永 瀬 勇・尾川清子・鹿島倫子・加藤けい子・兒玉なを
野村雁島聲・高山要造・原 哀叫・安高きち・和多田忠人
執貝田清子・田名とも子・升谷千代・梅本静恵・東城小南

現代女流歌評家 泊 良彦

隨筆・「歸 雁 集」…………… 加 川 文 一

加川文一氏・隨筆集・近刊…………… (紹介) (良彦)

東 歌 に 就 了…………… 加 藤 けい 子

○高 原 詠 草 二 三 十 氏

三保周策・大平澄治・中村ます子・山本徳之助・阿部たみ子
林田美都枝・貴家しづ子・柳本 錦子・鈴木緑松・清時文子
高橋東民・大園晴子・野田 勇吉・松浦清子・矢形溪山
西村 津矢子・吉田 晴江・星加賀(富久)・佐藤不二子・安井静女

大場眞子・越後桂子・中川末子・足田桂子・小野喜美子
濱田八十子・岩田立枝・赤星さと・逸名氏・岩月靜惠

八號 詠草短評

泊良彦

○高原詠草

三

十七氏

矢尾嘉夫・綾織謙介・山内曾六・村上正男・豊福昌範
宮村一雄・冲宮求香・吉松博志・吉田さみ子・西居登美子
岩本志満子・上村比呂子・山本雅子・川崎富子・渡邊あゐ子
仁熊登美子・泊良彦

前號 十五首抄

加藤付るゑ

ハート山支部歌會草抄

加藤はるゑ

グラナダ短歌會卯月抄

木林本田鶴子

編輯後記

泊良彦

六氏各一首鈔

小泉 恭三

すべては過ぎゆくものと思ふ時わがこころいたし街中の
みちに

大村 吳樓

墓間に盆燈籠の倒れをいくつかおこしわがもとほうふ

川上 小夜子

重なりて反りゆたかなる漬木綿の月の照り葉は冷たきま
でに

塚田 菁紀

しみじみと訴ふるもののある如し生き生きと徹る子の泣
き聲はへニ男生る

加藤 淘綾

足ることなく過ぎし一生を言ひ出づる母のわがひは我に
かかれり

篠 曉村

面伏せてしづかにあゆむ兵見れば生き死にのなかにきは
ひしともなし

人生自然の幽寂

泊良彦

俳聖芭蕉翁の寫さや、その附添の門弟が彼に辞世を乞うたところ、昨日の句は昨日の辞世、今日の句はけふの辞世だと應へたさうである。日々辭世の心を以て句を吟じてゐるから殊更に辞世といふものは無いとの謂であらう。この嚴肅にして敬虔なる作句態度を堅持したからこそ後世まで俳聖と尊崇されるに至つたものと信じる。

現代短歌の巨匠の一人窪田空穂先生を訪問した一門弟が或時、歌は詠みたいが行詰まつて詠めない旨を語したところ、今斯く相對談してゐるがお互ひ明日はどうなるか判らぬではないか、これが歌でなくて何だらうと言へたといふことである。(本文筆者曰、この對談は記憶による大意)共に吾らが作歌の心構へとして深く味はふべき問答だけあるまいか。

今日あつて明日の不分明なる命だと感じるとき、心は求めずして敬虔に嚴肅に沈潜するであらう。而して明日に對する不安と嚴肅感より吾々は更に超脱還元して宗教的、樂天的清氣を把握養成し、深く徹したる眼を以て天地の万象に對ひ得るであらう。

吾々はもつともつと人生自然の幽寂に徹すべきである。

絶詠

故中村郁子

癒ゆ癒えぬ御手ぬちすでにさだまれる運命と思へ病む身願む

この朝枕をかさね窓の外にさやぐ雀の聲に親しむ

病中ゑの心おくれか下潜り行く隠水のひそけさを願む

追悼歌

糸井野菊

病院の規則は犯し來し吾れをよろこばず聲すでに幽けく(二月十日、三首)

注射の痛みを堪ふと絶りすすみ手の力をわが手によみつ

癒ゆいえぬは御手にやだぬと詠まししが生き度き心滅うしたまへる

駆けつけて取りたるみ手の冷たさは術もすべなし君逝かむとす(三月二日)

生きたき希望一途に二年のながきを言はず耐へ來しものを

現身の苦痛おぼえずなりたまふ君が面輪におけか翳さ逐し

キヤンプより出さるるさきのうれひもぞのうせしといふかいまはの^{まじ}際に

二年振りにはじめて樂になりしぞと冷えゆくみ手を執りて歎かす(夫君)

み軀に安眠すみれば瀾濁のこの世にまたも醒むることなし

柏木 天 浪

ひたすらに癒えむ希望を失はず宿痾の毒と君知らざりし
生死はみ手ぬちにありと詠みせし君の病舎に月のかかれり
瘡常癒えぬさだまれり身ぞと遂にかも歌詠みませる心し歎かゆ
真心こめて歌友の造りし大化輪君に捧げたりみ稽の前に

神 部 孝 子

遠く住みて心すかせずみ葬の式に列び得ぬ歎きするかも（リムタルニケにて）
再會を互に約し握りたるみ手の感觸の弱かりしかる
神意のまにまとせちに祈りつる願ひきかれしことのかしこさ（洗れを受けし
れしとて）

中 川 末 子

み報せに息急き來ればすてにして君が意識け空しかりけり
み痛々もおぼえずなりていやけてに君がつく息安らにかそけし
君が指冷たくなりゆき生の緒の絶えむとしたまふまさに現に

中 村 ま す 子

君はすでに逝き給ひしか電文をひとり讀みをへて身ぬち震へり
み病の重さをさとり賜ひにける最後のみ文は永久に保たむ

満 永 秋 津

友逝きて悲しと思へ永遠へのこのみ歌ぞ吾れを勵ます

大場 貞子

○ 二十年を御名にあくがれつ師と仰ぎしこの一年の侍いさを思ふ

○ 瘦せやせてむしり淨しき女體に濃紫のドレス最後に着給ふ（告別式）

三原 かつの

○ つひの日の迫りしときに受洗せし君がみ霊の安らけくこそ

○ 今日中のちいく度教會にやかむともまたは見難き君がみ面輪

越後 桂子

○ 荒原に雪降りしづむ静寂に一生を閉ぢて逝きし君はも

○ しめやかに薨りをけれり今日のこの曇れる空のものを教しきよ

濱田 ハナ子

○ いたつきの身をもいとけさず教會に出でせし日のみ面輪ばや

春野 陽子

○ 事なげに戲言いひて在せしが君のいたつきしむく目立ちし

足田 桂子

○ 久方の天に通けす眞道得て君逝きすせり天つみ國へ

岩月 静恵

○ 枕並めともに病み臥しやさしくも慰められたがし友は世にさ

眞杉 茂

衰ふる生命なげかずたまやらのいとつつましき君の経詠

村上 静子

重おもと人に歎きけ去らなくは小鳥かなしく春告げにけり

文 塚 砂 丘

眞白くぞ春の雪積む曠原に惜しくも消へて天に還わら

三 原 泉 流

枕上^がに咲きさびしこの花よりも命短かき君をしぞ思ふ

安 里 流 泉

安らかに道を求めて師の君は召されてゆきぬ神の御許へ

檜 山 水 府

逝きませし歌の師の君偲びつつ慕ひまつらむ淨き心靈を

堀 内 武 子

病む身さへ忘れたまひて床の上に歌語りぬし君のおもかげ

岸 田 望 州

ありし日のおもかげまみに涙み来て思へば悲しき運きませり

甘 菊 地 静 波

笑みいつつ君の語りし言の葉の心に觸るる夕べ寂しも

菅 野 英 助

死に近き君を見し夜のかへりぢの月さへいまは忘れぬに

北白川治重

亡き人のかずに入りにし歌人の遺せし歌は世々に傳し

望川秀一

憂ゆいゝぬみさだめと君は病める身を捧げ盡して静かに逝さしか

甲田洋舟

敷島の歌の道をし命々もこと絶ゆるまで精進すせし

中津甲

優水たるみ歌も悲しゆさすせし友を惜みて涙落ちくも

嵯川忠八

歌枕もとめむ旅にあらなくにここに果てむと思ひかけさや

山炭谷慶造

キリストのしもべとなりてまろこびにあふれて君は逝さすせしとふ

田積みどり

慕ひてし君逝きましぬ高原の春の夜悲し星のまだたき

寺澤梅

此紫の由緒もふかし風信子散りにし後もかほりとどめて

金子伸三

峯土番や知己の我友息絶しし荒野の里のなぞなつかしき

新 浦 健

けけし世も共にたへなげ堪ふべしとぞ乃げに言ひ分る君なりしものを

田 中 茸 城

わもころのうまさ茶うけのもてなしをすねく受けてし夜頃徳けゆ

阿 部 た み 子

概もあらば見えて歌謡聞かすけしと念ひしこともつひにむなしき

林 田 三 津 子

戦ひの果てむ日までけその命保てむと言ひし君逝きましめ

和 多 田 五 人

枕重ぬ雀の聲に親しきすみ歌を詠みて安らひぬしを

田 名 と も 急

國つ歌ともに詠み來し急にし思ひひとり誦經すたにわもころに

永 瀬 勇

君が上を怖れて友に書きし夜にみずかりぬると聞けばかなしも

賣 家 し 子 子

のこりたりみ歌をよめばわが心君のみたまに觸るる思ひす

佐 藤 不 二 子

いたつきの久しさをさきて祈りしがつひに逝きませしか見ゆる日なく

加々藤はるゑ

歌を詠む忽にしに君を知る久しきみゆる機をとけにうしなふ

仁熊登美子

別れにといただき來にし短冊を君が遺品と歎く日に還ふ

渡邊あいつ

國つ歌詠みつがしつゝ遂ににしてキヤンプに逝かせし君をしぞ思ふ

村上正男

後世まで残れとぞ念ふ君がみ歌生命の限り詠み來ましけるもの

綾織謙介

高原にのこるみ歌を讀みかへし沁々と君を偲びまつりぬ

豊福昌範

かすかなるみ命のさはもひたすらに歌を念じて逝きたまひけむ

山内曾六

逝きますと聞くにしみじみ歌詩くりて見知らぬ君のみ歌讀みつぐ

山本志満子

若きより歌に秀でし君ときけりみ病癒えず逝き給ひしか

吉田きみ子

をみえたることではなけれども國つ歌にいたすうなりし君とぞ惜しむ

矢尾嘉夫

アメリカに多くはあらぬわがどちの古き一人と君を惜しめれ

泊良彦

まだ生きたしと見舞の友にいひしちふそれより二十日も保てざりし君
雪の夜の更けに月洩れてやや垂りし氷柱光り眠わがてに融水(融水は雪が溶けた水のこと)げ
終ひにして牧師に縫りし心思へば未だ期のおけれわが胸に沁む
渦巻にかかはりてたびし二枚の手紙書き渡水めとあるをかしこむ
時の行きむごく險しくわが歌友ら相つぎ病みて戦時收容所に逝きぬ

追悼詞

中村郁子氏を悼む

柏木天浪

中村郁子氏と交遊は五年、その間一度も氏の怒った顔を見たことが
なかった。信念に強い冷静な理智的な人であつた。何事に対しても感情
を制へて理性により修養を怠らぬ謙譲の友であつた。

大正終末の頃、シアトル市北東部郊外の歌壇に、中村風信子、堀江さゆ
り、山下紅音といふ三女性が各々特色ある歌をかけるがけり発表してゐた。

當時男性では田中葦城氏一人丈け光つてゐたやうに思ふ。その頃私達文藝人同志は藝術に關係ある分野を綜合して趣味の會といふ團體を組織した。達筆である氏は書記を手傳つて呉れたことを覚えてゐる。

これが動機となつて、前記の人達が中心となり華陽會といふ短歌會が生れ、日米開戦当日開かれた歌會は繼續したのである。

昭和元年に氏は『歌集風信子』を出版して在米歌壇に知られ、開戦二年程前に、女性文藝人によつて此の會といふのが中村、糸井兩氏中心で生れ、勿論短歌が主なるものであつた。が、立退によつて全ては解消され、ピアノから当地に移動された一九四三年の秋、金子伸三、田中葦城兩氏の所入で峯上香短歌會を起したのであるが、翌年金子、田中二氏共に東行するに及び、中村氏は手術後の不自由を忍びつつ責任加重、糸井氏よくこれを援けて今日に及んだのであるが、糸井氏も健康勝れず意の如くならざる時、遂に中村氏は永眠されたのである。

幾度も入院、退院、手術と打ち續いた。氏の病名は腸癌であつて、全癒の希望は極めて薄いとされてゐた。然し、氏はこれを知らずに最後迄苦痛に耐へつつ全癒の日の遲きを歎いて居られたのである。

本年初頭には夫君が盲腸の手術を受け、一時は危篤さへ傳へられ、二人共に入院しつつ会ふ事も叶はぬ情態が二月近くも續いたが、幸にして

史君は全快され安堵したのであつた。当病院の藥劑師として奉職してゐる一粒種の一夫君が、同じ病院の看護婦長の宇野嬢と昨年暮結婚され、この若夫婦より至れり盡せりの看護を最後まで受けられたことは、母として非常に満足して居られた。見舞に行けば必ず「遠いところをすみませぬ」と感謝された。歌友も代々く見舞に行つたが、最近ハ嚴と面会謝絶の札があるのて遠慮してゐると、野菊氏や木子氏が許されるので、男性の方は寧ろ女性を羨望の心で歸つたりしたのであつた。かくなられる四日前に、はんの一寸だけ最後のお別れをして來た。實に傷ましい姿であつた。

絶詠にもある如く、最近に至つては、人觀は最前線したが、死の前日に知友たる小平牧師を自う招じ、洗禮を受けらるゝに至つた。而も氏の令兄二人は日本に於て現に佛教僧侶であり故に、何人も佛教的方式に據るべきものと信じられてゐたのであつた。

生前氏が宗教に關して語つた事を知らない。然しその日常內的修練は、普通一般の信者と稱する層に比べて遙かに宗教的であつたと云へよう。

とは云へ、正に迫り来る死に直面しては、偉大なる力に總つて、焦躁せる不安から救出されむことを志したのであらう。最後に到て一神に身を捧げて安らかにこの世を去られたのである。これは吾々にとつても大なる暗示を残され様に思ふ。御靈よ安かれと祈りつつ筆を擱く（三月十九日）

郁子氏を悼む

糸井 時子

郁子氏は遂に逝かれた。この沙漠の中に移動して来られたまゝ逝つて
おろひになつた。これも未曾有の戦争が吾々の身邊にちかに齎らした一
つの戦禍にちがひない。

氏の闘病生活二年といへば決して短くはなかつた。その間三回の手術
を受けられ、あの病軀でよく二年も保ちこたへられたものだといふ驚きは
が氏をお葬りした後の心にまだ残つてゐる。

氏はミネソカに四二年九月入所され、その翌年明ける早々發病入院、二
月九日の朝第一回の手術を受けられた。その頃同ウロードに急性肺炎で入
院してゐた私は床の中でその手術の終わるのを祈りつつ待った。その私の
枕許に手術が無事に済んだ知らせをもたうして下さつたのは俳壇のKダ
クターであつた。

手術の結果思ひかけない病名が附せられた。以来私達の心には、絶えず
―この沙漠の中で死なせたくな―といふ願ひがあつた。よもや郁子氏
自身もこの沙漠の中に生を終らうなどとは豫感しないことであつたやうに
追想すれば郁子氏と私との交けりは昭和元年頃より始まつた様に思ふ。

當時氏は既に明星調から万葉的歌調に移りかけた所謂過渡期時代であつたが、その明星歌で鳴らした『風信子』の文名は高かつた。

その風信子氏に歌の指導を仰ぎたい旨を申込み暫らくみてもらつた。再来交はりけ十八九年に及ぶどちらかといへば深くはならず、むしろ断水ぎれでさへあつた。ところが一九三九年三月、此の會が生れ、女人ばかりの集りが出来る様になつてから今日迄殆んど一つの行動に在つた。沙市立退の際ピアロッア入りも一緒に先発隊に加はり、ミネドカへ移動して以来は病院の近所なる隣に住み、冬が来ると必ずどちらか入院するといふ始末であつた。

とにかく、第一回の手術の結果は非常に良好で、殆んど健康状態に見受けられたにも係らず、昨年十月半再入院の己むなきに至り、十一月第二回目の手術を受けられたが思はしからず、引續き本年一月十九日、第三回目の手術の結果は全く悪化の一路を辿るのみにて、不安は愈深くなるばかりであつた。

私は二月半の病床からやつと足が立つ様になつた去る二月十一日、秘かに病院の規則を犯して氏の病室を見舞つたが、それを非常に悦んで泣かれた。——長く逢はなかつた——こんなに瘦せてしまつて——でもまだ生き度いと思ふのよ——こんなことも言はれるのであつた。その時持つて上つた

泊氏の渦巻をお手に上げると、巻頭のスワイルの歌の文字が美しいと言
はれ、幽かなお声で誦まれたことであつたが、氏の面影は一月餘見ぬ間
に全く瘦り果ててゐられた。私は驚きと悲痛に打ちひしがれた心を顔に
出すまいと力めたが、病み上りの弱い足が病室を出ると長い廊下の上に
震えてならなかつた。

——あ、もう時が迫つた——神様の御はからひはどうすることも出来る
いのだ——どうか安らかに美しく——最後の御準備を——私は歸りの途
に悲しき、をのなき、祈つた。

それから私達は毎日時間を期して祈ることを約してゐた。近いセンタ
ーの友、速いキガブ、テキサスの友も、共に俱に。

遂に最後の日が来た。郁子氏は突然自ら牧師に逢ひ度いと言ひ出さ
れ、そして受洗された。而してその翌日の三月二日午後九時、安らかに
昇天された。

全くかくされてゐた親しい人々の涙の祈りも知らずに逝かれた。知ら
ずして逝かれたと思ふと、後に残つたものの心も何かかくて明るい。

然し氏はなほ若かつた。二十有餘年間、この北米歌壇に残された業績
も浅からず、女流作家としてなほ将来ある、これからいよいよといふ人
であつた。惜しいことであつた。謹んで御冥福を祈る！（一九四五年三月二日）

噫 中村郁子様

中川 末子

一時は殆んど全快に等しい程健康さうにふとつてゐらつしやいました
中村様は復も再発して暫くお家に臥ったり起きたりしてゐらつしやいま
した。布を張った衝立は氏のベッドを半ば遮つてゐてお訪ねしますと、
いつもその蔭から言葉をかけて下さいました。そうしてどんな時でも快
く迎へて下さいましたので、御病人といふ事もつい忘れ、長居してしま
うのが常でした。斯る中にも御病氣はよくはならず、遂に十月半ば頃入
院なさいました。

それからは殆んど走つた様に隔日にはお見舞申して居ましたが、醫者
がまだ何の手當もして呉れないのよとこぼし乍も、その頃はまだくお
元氣で何をいつても何時も御遠慮なさいます中村様にお髪を梳きませう
かと申しましたら、お願いしますといつて床の上にお座りなさいました。
それから暫らくの間お訪ねする度に髪を梳いてお上げする様になりました。
た。猶太みの黒々としたお髪は五十才前後の人とも思はれない程豊か
でございました。随分白髪が来ましたでせう？と仰言いましたが、肩にかけ
たタオルから床の上に散らばつた抜け毛は御病氣のせいかと手に拾ひつ

一人寂しく思ひました。

或晩、久振にいらつしやいましたといふ片井氏とご一緒になりました。お二人の話は弾んでおもしろい。私は何時もの様にお髪を梳いて上げてをりましたが、その後ソートレーキにお歸りになった片井氏から、私がお髪を梳いてお上げしてゐたのを見て迎も嬉しかったとお便りをよこしていらつしやいました。

その後間もなく三度四度と手術を重ねその都度衰弱激しく、病苦益々耐えられ、注射をやつとその痛みを和らげていらつしやいました。

でもどんなお苦しい時でもお見舞すると御自分の苦痛は仰言らず、却つて私達をねぎらつて下さいました。忙しい仕事を持つてゐた私は只お見舞ひしては時々お體をさすつてお上げするより他術もなかつたことが今悔まれ心からお詫び申して居ります。

中村様の御冥福を祈りつつ筆を擱きます。

追憶

シカゴ市

中村ます子

今日届いたお手紙に、郁子様は小さいお骨壺の中に納まつては舞ひましたしと野菊様が嘆いて居られます。臨終前後の模様から嚴肅な告别式の情況を目に見る様に知らして頂きながら、私にはまだ夢のやうな氣がして居ます。

お親しくなつてからは六七年に過ぎませぬが、同じ田端に住んで居たことも後になつて知りましたし、歌を見て頂くやうになつてからは、何もかも打ち明けて纏つて来た私として、氏の御他界は誠に大きな痛恨で唯呆然とするばかりです。

最終のものとなつてしまつた一月十六日のお手紙には、恐らく最後と思はれた手紙を前に萬一を慮ひ書いて下さつたもので「若しこのまゝ、貴女に書かぬ事になりけしむいかとそ水を恐れて苦しいですが又楽しい心持にもなり得ます」といふ文句があります。お苦痛の中で書かれたと見え違筆な字も所々乱れてゐます。お手紙を讀み下り、御子息のお結誓がどんなにお喜悅びとなり安堵となつたかを知つて私も亦大へんに嬉しく慰められます。

私も野蠻らしく失禮してゐたので直ぐ返事とお見舞の紙を手紙を認めて御病

者分心なさいと思つた。

いま「すもも」であつたが、もともとかいふ手紙も書けりやうだ。し
てをり「すもも」云々といふ後の方、二三日はくはく水が續くと思
ひ、愈えてゆくかと思ふ日、心にほのかつ拝見して行くの樂しみにし
て、^{「あけ」}置けて置く空気がけいけいといふ声も聞え、水が少く
た……いかに紙が溢るに溢るた。

拙集。……意を保持して下すつた。突然の感激が、斯うした元氣を心に興
入。何度か、手術後の苦痛で、長く持たず、首をきき、永井氏が

氏の字は大して、乱れておる。かゝつた。達筆な書
て披露した。拾三日附で、風の吹く、鉛筆も二枚であつた。達筆な書
想ひも、かきす、その危水、仰つて、留める。郁子氏より手紙が届いた。の、敬書し
ぬ。こゝに、氣付く、恐水を抱いてゐた。と、く、同月、九日、だ、と思ふ。
次々、に、郁子氏の苦痛と衰弱が、目立つて、ゆく、報に、接して、私も唯、な、ら
故、村、越、氏の追悼號に、尊念してゐた。去る二月、ミ、カ、力の、二三、歌、友、かい

中村郁子氏を憶ふ 泊 子

○ 子 〇 御 福 子 利 子 ○

るにても、西の事の出来る子様を懐かしく悲しみに堪へ
けられし。今後は私共にとつて思ひ出多い紫の會が復活する日があ
も歸りめられてお地獄で現御身は三日頃迄外意なく中絶せき悲しむ

ののお心遣りな混み合ふ汽車の中で、後度感謝してやう。私
 郁子様の御來た事を一日々思ひ出して、お報せを頂くやうに
 誰か言ひたい事なといふ。心の隅々まで、心を大に
 新に心を隔てて、心を大に、心を大に、心を大に、心を大に

へてゐます。私共一家のためにおお辨當を作り、サ。キ。ツ。カ。ツ。で。迄。入。り。つ。す。う。た。お。顔。や。お。言。葉。な。ど。が。今。も。猶。私。の。眼。に。身。に。付。き。佛。として。温。い。思。ひ。出。た。り。下。り。て。走。り。寄。り、再。度。の。握。り。を。手。を。求。め。た。の。で、か。が。笑。い。だ。が。喜。ん。で。下。降。し。て。ハ。バ。ス。に。乗。つ。た。私。は。見。え。ない。元。氣。な。子。様。お。病。人。と。は。見。え。な。い。別。れ。の。お。言。葉。も。終。つ。た。様。子。様。送。り。下。つ。た。朝。雨。模様

中の苦吟を時には見せて下さいと書き添えておくのだった。ミネドカよりの返信ではこの頃氏に詠歌があるやうに思はれなかったので、萬一のことを思ふと、どうしても一二首なりと近作を見せて貰ひたかったのだ。それとなく私は勧めたのであるが、この私の意圖は遂に達しなかつた。これが最後の受信、返信だったのに、後で聞くところによると私のこの返信は氏の生前に届いたまま、へひに家人より郁子氏の手に渡されずに了つたらしい。お病人へ最後となつた心からの見舞の手紙が達することを得なかつたと聞く私の心は遺瀨ないものである。

故村越氏の追悼号を發送して一くつらぶする間もなく、私は或事情のために心急ぐこと有り、直ちに現代秀歌選集の編纂に着手してゐると、三月の五日(月)午後一時半、當所で三度目の電報に接したが、正しくそれは三度目の悲電たり、郁子氏の訃報に他ならなかつた。

三月二日夜九時遂に長への眠りに就かれたといふのであつた。

僕が最初に故人の名を知つたのは昭和の始め頃、その歌集「風信子」を、たしか當時羅雅村日本社にゐた山崎一心君(前シートル)より得た時であつたかと思ふ。又、南詠會創立(一九二五三月で滿卅年になる)一周年紀念として、在米日本人歌集出版したのであるが(僕は初め尚早を称

へたが高山泥草君などが意気込んでやつたそれに、田中葦城、中村郁子、神部孝子、其他茂氏かが北方より歌を寄せられた。斯ることに氏との交渉は始まつたのであるが、親しく文通するには至らずにゐた。

然るに昭和十年九月、僕によって北米最初にして唯一の短歌専門雑誌が創刊され、その三四号頃より郁子氏も同人として参加して戦争に至つたのであるが、その間時折隨筆など寄せられて皆に愛讀された。

この東津久仁以前から、シアトル方面歌友として文通の最も初めは野菊氏であつた。その舊關係から東津久仁の事も同氏に種々斡旋を依頼したのが幾分郁子氏の氣に添はぬものゝなつたやに、後からわかつた。

東津久仁は現在の高原と異なり、最初より遙々日本に原稿を送つて印刷に附したので、関戦と共に自然廢刊となつたのであるが、その命脈はそのまゝ盡きることなく、旧來の同人多数が梗幹となつて再び高原が出る様になつたもので、已に創刊以来初年にならうとしてゐるわけであるが、追想すれば、この間に主要同人伊勢田はつゝを最初とし、瀧美久雄、宮内喜造その他一二君を東津久仁時代に喪ひ、高原となつてからも已に三君を喪失し、私としても實に感慨無量である。

最初に僕が郁子氏に面接したのは昭和十七年拾月またユタ在任時代に二百哩を旅してミネソカに往訪した時で、林田三津子氏と同行し、キヤ

ニアといふものをはじめて見たのである。なほ移住屋々ところであつた。再會としての歌友では糸井、神部二氏のみで、他は田中氏も中村氏も初対面であつた。夕方野菊氏のところに訪ね着き、それから追々と隣町の諸友にまみえ、多分郁子氏も一緒に降り、如き星屑の下を一哩程歩いて神部氏を訪ひ、再會の握手をした。

風信子の巻頭には猶若かりし時代の氏の寫影が飾られてあつた。寫眞の撮りやうかも知れないが、何かしらけはしいものを感じてゐたが、當時相対面した氏は和やかな方であつた。お子さんのことを訊いたら一人だけのことだったので、何気なしに、それは駄目ですと冗談いふと本當に駄目ですと眞面目さうに應へられたので自分はいつとしたが、一人子の母者は若きより何か健康なうぬところがあつたのかも知れないとこのごろになつて思ふことである。

一昨年拾一月廿八日夕方田地エタをWR4の米人に送られて僕は發つたのであるが、その米人の所用によつて、實に思ひ掛けもなく、ミネトカキヤンプに立ち寄り、その病院の空室に伴はれたのはもう拾時前だつた。翌朝の出發迄に歌友學友の拾人以上に面接して米國での別永をしないと思ひすぐ夜の院外に出た。病院に最も近いのは郁子氏なることを豫て知てゐたから途中一度人に訊いたのみであつた。

ボーチの薄暗に立つ僕を見られた瞬間の氏は驚き、その驚きが急に喜悅に変わったのを感じた。この年二月氏は大手術を受けられた後であつたが、當時は頗る快方で、僕がツールレーキへの途上偶然に一夜だけの縁を以て立ち寄れた旨を話し、今夜中に成るだけ諸友に暇をいただいたのだといふと、直ぐ隣区の野菊氏迄案内して呉れた。風気分とてもう床に入りかけてゐた野菊氏も同様に驚喜して迎へ、そこで郁子氏は歸つて貰ひ、また隣区の田中氏（東行直前）を訪ひ、この二人に寒い夜道を案内されて、柏木氏、神部氏等を訪ひ、最後に越後氏方に辿り着いたときはもう十二時前だつたらう。ここで野村氏や足田氏にも會へ、共に御馳走になつて一時頃病院に歸つて就床。翌朝早く又野菊氏らに伴はれてその他の中村ます子氏や学友にまみえ、病院に戻ると、未見の二三氏迄迎えてゐた。此朝拾時半未人に送られてボーセへ向つたので、実に慌しいと接待の暇をであつた。

愈々乗車した僕に對ひ、郁子氏は、お世辭のつもりかうえうい人はみなツールレーキに行つてしまはれる」と言はれたので苦笑しつつ、「いや、氣狂ひじみた人の行く所でせう」と応酬して互に笑つて別れたことで、當時の事が今猶眼前に彷彿するのであるが、その後快方を傳へられこの久しき歌友も、再三の手術効を奏せず、病革まつて遂に不歸の客と化された。

前記の如く、氏の歌は明星調に始まつたが一般歌壇と共に現実的、享樂短歌に移り、東津久仁創刊時代已に明星調から脱してゐた。この轉向と云ふ事は精神的にも實際的にも頗る困難に違ひあるまいが、それを遂行したところに氏の偉さがあつたと思ふ。併し遂に日本歌壇に進出するに至らずして生を終へた。その心はあつたらしいが要するに機を失つたものらしく、曾て僕が勧めたり、もう諦めてゐるとて応じられなかつた。充分の特徴と個性を發揮する迄になつてゐなかつたとは思ふが、日本の先進に直接師事することなくして到達した境地として異とすべしだ。是は恵まれた才ありしが爲で、天若し猶壽命を興へたらその齡と共に大成も難事では無かつたらう。此意味に於てその長逝は痛惜に堪へない。

下供、故村越氏の追悼記にもものせし如く、キャンプより同胞四散前に逝き、盛葬を受けられしことは、故人としても遺族遺友としても幸だつたのであるまいか。私は村越氏の歌碑の事をその遺族に提議したが、ミネソタ歌友諸氏が郁子氏遺族と相談し、程よき自然石を見つけて、今の中に歌碑（墓碑とは別）を建立されたらどうであらう？！已にその時談があるのかも知れないが敢て進言する次第である。なほ近く編纂せむとする高。原。抄には三故人の遺詠を是非掲げたいと念ふ。書き度日々に盡きないが紙面の都合で筆を擱く。ひたすらに氏の御冥福を祈ります（四・二七）

高原詠草

小感

永瀬 勇

窓を洗ひ煤掃きもしてやうやくに心ととのひ年待つ吾れは
つごもり蕎麥食べつつ念ふ來む年も心はげみて歌詠みつがむ
去る夏は病みてあやぶみし老い母を健けき顔に年祝ぎ交けす
ひとの上に見てははろけく思へりし四十の齡に吾がとどきけり
野司に登れば炭が焼く煙しろくなづさふ冬氷原の上に
吾が背にて負籠の中の飲み水がたぶたぶ音すひと足ごとに（登り山拾遺）
冬日さす石の面てにへばりつき蜥蜴みじろがず山の明るさ（全）

○

尾川 清子

大寒の極まる空氣に湖の水氣顯ちたつ蒸氣となりて
湖の面よいでゆかしつつ立ち昇る蒸氣染まりみゆ極寒の陽に
むらむらと蒸氣たつを見て過ぎたりし辰りや照りて湖のうらなり
階下より屋根にいでたる筒ありて蒸氣噴き混る荒ぶ吹雪に（洗濯工場）
互みにし今日の呆けさを相嘆ふときたぬし道迷ひつつ

呆けさをあげつらひ合ふ友と我けた頼りあひ知らぬ街ゆく
赤練丸の壁の面の陽おもてのやうめく見れば烟影かも

○

鹿 島 倫 子

滅び果てし家ともなく墓石は斑雪を置きて春光を放つ
日輪の燃えつつ入りし餘光なほ森に残りて樹々の静けさ
朝の霜りうの樹肌に光りつつ秀枝の新芽陽に炎り見ゆ
もろこしの素枯畠に人出でて土鋤くさまが春光にかなし
春の嵐日もすがら野に鳴り止まず心を遣らむたどきあらず
春嵐もなく夕光をかき濁す街にうなる鬼らをらび交せる

○

加 藤 は る 恵

しんしんと凍み徹る晝のけぶかさに轍の音が轟き過ぎつ
ハート山の裾みひららに起伏しの丘のハタけ雪照りにつつ
煤びたる根雪が上にあはあはと今朝降る雪は見るにすがしき
春に向ふ陽ざし明るし柳枝の本肌ぬめぬめと艶だちにけり
ただに生くる歌のみわ水の聴歌は君がみ歌に憶ぢてこそ思へば
(歌集過巻)

コロラド河畔

児 玉 な を

中洲へと河の浅瀬を徒渉る少女の素足さやに眞白き
吹き過くる風に乱りて中洲なる枯草むらは寂びさびと見ゆ

大河の鳴瀬の音此方よりも彼岸の方ぞいや高くきこゆ

うち霧うみ水にむかひ羽根白き小禽啼きつつ翔ひ隠るひめ

古の渡邊激しき時に由り来り悠久に流らふ大河に對へり

見ろ見るうち飛行機は視界の果てに消え残り煙幕の翳く目にあり

わが魂に熱き息吹きの通ふがに歌集調卷詠々つぎにけり

○折々の歌

野村 鷹聲

感情のもつれしままに歌反遊きて解くる日知らぬ我心かも

世の汚れ失せし靈なりうつせみの拘けり棄てて潔く遊蕩らむ

北月にとまり黒鳥うも虫を啄めどかかはりあらざる羊草喰む（所見）

けたたましく妻が叫ぶに馳せ入れば血に沈まりをり嬰兒は吐血して（思出）

吾血今は吾兒の身ぬちに廻りしか呼吸絶えだえなりし鬼が泣き立てつ

生れて三日死に瀕りしが生さのひて吾兒は十歳を健やかにあり

たゞ妻が吾れに遺せし兒守りつつ思さばゆく吾れにもあるか

春雜詠

古田 山 要 造

雪晴のこの朝靜に日に解けて軒より落つる氷おつぎつぎに

雪解けのぬかるみ道の泥けねて自動車は走るあたりかまはず

西晴れて雲間の日光夕方の雲の遠嶺に照りかけりせり

北風吹きて雲千切れ飛ぶ夕つ空に鋭く急に啼きて千鳥飛ひすぐ

戦ひはいまよ由々しく吾が心^{なみだ}即る夜半に地圖開き見る

見送りの入込みの中に吾も居て言葉すくなき別れしにけり

春へ

原 哀 叫

歸ぬ日なく死なむ假想を持ちたまふみ歌け讀みて心を去らず(歌集湯巻)

しのめの凍たる道をいたに行く犬の脚よりわげき音たつ

うすら陽に霧氷^{きりばら}散く水ぬれには雲とけてゐて春を思はしむ

今の世は心冷たく生くべしと拾ハ乙女顔あげていふ

靴^{くつ}鞆^{もろ}のかたしき子等が靴に擦る地は穴洼みとなりて來にけり

うなかぶしかちわたりゆく春川に鳥の毛浮きて流れ来るけや

産卵を終へたる亀に遇ひて立つ何か間ぬけし犬の總^{もろ}なり(映画)

○

安 高 き ち

石炭の上に眞白く雲積める貨車長々と走り行く見ゆ

大工場地デトロイト指して石炭を日毎夜毎に化車運ぶ居り

恙ありて寝ねつつながもある曇り空鳥二三羽鳴きて過ぎけり

蛙なく聲とぞ思ふ雪消えて間なきに雨の降れる夕べを

遠^{とほ}方の軒端に白く見ゆる花けざやかにしも空に白へり(三月末)

むすばれて幾月日解けぬ我が心そのよるとこる國にかか水り

早 春

和 多 田 忍 人

苗床のカバー巻きゆけばガラス戸に幼なこほろぎ今朝は拾まり

南向く土堤に緑の一葉みえし蓬夜の間にここだ芽ぐみぬ

この春やお櫛にここだ抜け毛せり立ちて抗く間を身疲水にして

さつちりと髪結ひあげて清^{すがすが}と豫定の仕事果さなむいざ

たづねれば静かに教へ行にまた示し給ひき母は偉かりき

紐ときて靴ぬぎ遊ぶをおぼえし児に忙しま今日け風邪引かせけり

墓参

贅田清子

訪ひ來つる友の墓地はまだ軟く芽生へし芝に夕光^{ゆかり}淡しへ村越氏の墓に詣づ

友眠るここは墓と跪き祈るに匂ふ白百合の花

白百合のあえかに匂ふ友が墓振り返り見つつ別水來にけり

春たけむとす

田名ともゑ

子と駈けて家めぐりつつ柳嫩葉^{やなぎの若葉}芽立明るきに手を觸水にけり

牛飼場汚しと見て行く露路^{つゆみち}にタツタの蕾^{つぼみ}ひらき初めむとす

おもむろに食みては憩ふ牛が背をひる東風^{あづまかぜ}わたる牧場に対へり

どよもして児ら出でゆきしあとの部屋に積水の減はひそかに立てり

夜を徹し鐵筆終へて冷えきりし身に快く熱き湯浴す

とらはれて三年^{みとせ}かかさず書きつぎし夫が^{はた}上臈^{じやう}法話を我け寫しぬ

○

介谷千代

足痛き我夫にして勢まじひよく働かず見つつ怠り難し

たまに父の父子の語らひ日米のいくさに觸れて激しかりける

南庭のポプー若木の葉は青く素枯れぬまに春かへりけり

氣にかかる事もあらなくに春の夜は夢多くして寝かてにける

ひやうひやうと音に鳴りつつ春嵐吹きの荒ぶは日もすがらなり

雑詠

梅 本 静 恵

光掩ふ土塵どじんの中を駆け走る人黒ぐろと浮きて見えけり

荷汽車よりおろす籠かごの中にすがすがと咲ける菜の花われけ眼守りまもりぬ

向う家の二軒は空きぬ残り住む人も出で行かむ噂うわさつのもり

迫り来るものの強さに眞球まみへば愁おもふる事の愚かさもする

眞澄まみみたるその魂たまのおくがにし觸れて處すべき時ぞ到れる

○

東 城 小 南

曉あけ近く睡魔ま襲へば交替の時を待つむうら寂しくも

事茲に至りて涙なからむや二舌のへいのさだめ動かず

現代女流歌評釈

泊良彦

これからはたゞ歌集の中より抽出してものするつもりである。へなほこの機に一言しておかう。八号迄毎巻頭には、ある一氏の作品を掲載して来たが今後は歌集に収めなかつた人々の作品を一首二首づつ掲げることにしてゆきたいと思ふ。

吾在米歌壇には婦人歌作者が大部分であるのに、之迄殆んど女流の作品に就て書かなかつたから、今度はその女流歌を歌集より抽いてみよう。

八天の下大みたからの子を牛みて祝ふ心はわたくしならず（端午）

ふたをやかに撓りて指のさす方にててるき空の深さ見やなり（舞踊）

ふかつきりと咬みあふ齒車をまもる眼の觸水なば物も切るべくおもほや

田賀光子氏作。氏は結社潮音主宰太田水穂氏夫人で、作品は筆名を以て發表してゐる。潮音の歌風は大方の現代字實的短歌と類を異にしてをり、太田氏夫妻の歌にも吾々が解釈に困難な高踏的象徵ともいへるものを往々に見うけて従いてゆけぬものもあるが、私は現實的、字實的のもののみを歌集には収めたつもりである。

人の歌の四五句は個人的の心で祝ふものでなく、天下人類栄光のために祝ふものであるといふ意であらう。大みたかの子」かういふ意識は古界中でわが日本人が最も強く把握してゐるのではあるまいか、そして某々國人など、この心持を理會し難い傾向にさへあるのであるまいか。その水は兎も角として、この歌、極も大きく、聲調おほらかに徹し、内容としての結句に於ける作者の主觀に特殊性有りその特殊性が普遍に達してゐると思ふ。又は舞踊を観ての作であるが單なる興味に墮ちずしてよく深く觀察して対象を生動せしめてゐる。上句を、やかに挽りても現けし得てゐるし、更に四五句が深く、よい意味の象徴さへ感じられる。潮音の或る象徴的作品や夫の明星のそ水にはわざとらしいさのいやみが多いが、こ水にはそ水がない。これは工場參觀しての作であらう。連作中の一首である。婦人にしてよく現代科学の生んだ機械そのものをとらあげて感覺の徹つたものにしてゐる。一二句のかつきりと咬みあふも事象に即して効いた語句であり、四五句は更に清きさつてゐる。唯三句の動詞、助詞の用ゐ方は人によつてはこのままに済まさないのではあるまいか一抹の疑ひを持つ。

こゝで氣についたが、四句の第一字は歌集の方は解と鉄筆者が誤記してあるのを校正漏れになつてゐる。こ水は觸である。なほ別項の如く三四ヶ所に誤記を発見したから正誤しておく故どうか本の方を訂正方希望する。

ををみるごのつひの心は夫に頼りたたかれて吾け泣きつつ思へり

この日頃言葉すくなき子にとへげ心にふりて物を言ふなり（青年期）

ふ青年の四肢たぐましくふるはせて自己嘆かふ吾子を見たり

この作者は代議士夫人として將又アラ、ギの女流隨一として最も有名な女流作家ではないかと思ふ。島本素彦に師事したがその没後やがてアラヤを退いて自ら婦人のみの歌誌を出してゐた。四賀氏や牧水未亡人即ち若山喜志子氏と共に女流では有力作家と見做されてゐる。總体からいへば邦子氏はその先師の鍛練を受けただけであつて、歌がこり三人の中でも現実的でしつかりしてゐるかに思はれるが、優秀作のみに就ていふなら私は四賀氏を推すに躊躇しない。

さて、上掲の々、二句、つひのは終ひの、最後のである。意は誰にも解るであらう。この偽らない表出が力となつてゐる。前記の如き地位境遇にある而も婦人であり乍ら斯く大膽に表出したのは以て異例とすべきであらう。藝術は一種の恥さらしといふことをゲイテ¹かがいつてゐたと思ふが、或場合その恥さらしが妙に第三者の心を惹くものである。いやに取り澄ましたり元取つたりしてはいや味をみへるばかりである。勿論その表白の度合と現はし方、扱ひ方に大切なものあるはいふまでもない。

ぶらば青年期といふ前書（歌集には脱けてゐる）があり、この二首の前に、

○「男の子 汝れ 青年期来るたぐし まなやみを見つつ 母はもだしぬ」

男の子が十八九、二十位になつた時のものであらう。この前作を讀んで、
を味ふと一層よく作意が解る。又この頃、子が妙に無口になつたのが、氣に
かゝつて、どうしたかと母心に悩んだところ（以前と異なつて）心に觸れて（は
つとする様な）物を言ふといふので、結句末のなりは助動詞で、言ふを助
けて、軽い感動詞の役をつとめてゐる。歌ではしづく斯る例があり、ここ
でも、言ふか、もを軽くした様なものである。心に觸りて物を言ふなり」は
含蓄のある詞句で一首を重くものにするに効果あるものである。

6.の上三句は寫実であらうが、うまく捉へてをり、こゝも言外に餘情を
持った句である。青年期の子を通して母の感動のあらはれた連作と思ふ。

7.丈夫のさかりの歳と今はなりぬゆゆしさかもよ君の齡は
（若山喜志子氏）
又春潮のうねりとのみに我が心何かそぞろぐ夜半の浪音

7.何才頃の作か判明しないが、女性として將又妻として男子夫を讃嘆し
た声であり、ゆゆしさか、よには種々複雑な心情がこもつてゐよう。又氏の
居住せし沼津にて、恐らく冬より春になつた頃の作であらう。夜半の浪音を
きいてゐると春潮のうねりだと、そればかりで自分の心は何かそぞろな気分
になると女らしい心持を詠んだものであらう。餘白なく簡單に。

歸鴈集

四

加川文一

矢尾嘉祐氏の歌集『歸鴈集』が出た。奥涼しい上品な装幀で、迎も埃くさいキャンプでつくられた本とは思へない。印刷は矢尾氏自身、エプロン姿でやってゐられるのを度々見たが、根を詰めなければならぬ鉄筆の方は、機嫌をとりつつ、とらしつつ、といふ羨しい場面を見せ乍ら夫々人の手によつて全部がなされた。いづれにしても私の知つてゐる限りでは、今迄にキャンプで出た本のうちで最も美しい出来栄である。

三百十首の歌が収められてゐるが、それは過去拾ヶ年の間に出来た歌の中から一粒選りに選り出されたものばかりで、一首一首に矢尾氏のつねに保持してゐる謙虚な作歌態度が、ひそひそとした光りとなつて打ちこまされてゐる。私には充分歌がわかつてゐるとは云へないし、臆面もなくここで矢尾氏の歌の批評するほどの自信を持合はせないが、

○夏の日のい照りきびしき土原を匍ふがに低く蝶とびゆけり
○幼子は物食めりしが晝すぎの光りに向ひ走り出でたり
○縄とびむしぐさはすれど幼子の踏まへし足け地をはなれず
○夕遅く歸り來我を迎ふると湯上りの子が面かがよはす

○過ぎし日の雪まだ消えず踏み入りしおどろがなかに清くこそあ水

○光りつつただよひをりし夏とんぼ草野の風に給れたりけり

○蠟の灯に親子四人が面寄せて寝るに早きすべなさにある

○朝川に潮満ち来らし橋裏の小暗き水面に光ゆれある

○土蜘蛛はいでて遊べれど日向吹くいささ風にもおどろき易し

○明け方の天を啼きつつ渡る雁光にこそたてその一つひとつ

○鉄柵のほとりまできて佇みつ冬野見放けて歩みを返す

といったやうな歌をしづかに讀んでみると、私は自分で自分のところが美しくなつてくるのを感じ、その美しくなつた心のうごきに、自分をまかせでみると、素人の私にも歌が自づと分つてくるやうな氣がする。同時にそこに描き出してある人生や自然の勝手口にも案内なしにそつと一人で這入つてゆくことができるやうな氣がしてくるのである。

非常に親しみ深い。

詩ではよく新しさといふものが問題にされるが、歌ではそれほどにやかましくない。普通の意味での新しさといふものは一度私たちを刺激してしまへば減ひてしまふ性質のもので、次にけまた違つた新しさが必要られる。その次には更にまた違つた新しさだ。ただそれだけである。ただそれだけのものであるにいかかはらず、私たちの生活のうちで最も減ひ易い部分——新

しさに自分の全部をつぎこむことに浮身をやつすのはあまりに空恐しく、淋しいことだ。そんな意味でこれまで私は短歌の領域で保たれてゐる地道といふものに心を惹かれ、露ひとしづくをもこぼさぬ切々としたその美しい根強さにうたれることに、日本人としての幸福を感じてきたと云つていい。

矢尾氏の歌も髓でこの奥深い傳統藝術の底力を支へつつ、また支へられつつ、質実な氏の個性に沿うて現在の境地に辿りついてゐるのだと思ふ。不純物が削りとつてある。清濁併せ呑むといふやうな、大まかな線の太さや、感動の大きいうねりはないが、内に向ふ批判によつて自己をまもりつづけてきた人間の見せかけのない清潔な脈搏がぢかに感じられる。

矢尾氏の歌の特長の一つといつていい、ほど、氏の歌には自然を詠つたものが多いが、そこには矢尾氏の磨かれた眼光がとどいた部分だけが、少しの無駄もなくきつちりと切りとつてある。

〇桶を越えて落つる水音さむざむし冬川沿ひに歩み來しとき

〇寂かなる陽ざしの庭に枯芝は立ち直りつつ斑雪浮けたり

〇枯れ伏しし草の上に雪降りてみだれしさまに野の面昏れそむ

などはそのよき例であらう。生活を詠つても自然を咏んでも、矢尾氏は自分の見た以上に誇張しない。矢尾氏は自分の歌を、また自分を、完全に自分の支配圏内で生かしてゐるのであつて、それは矢尾氏が十年の精進の

後に獲得した『ちから』なのである。その『ちから』が生かされることによつて矢尾氏の作品が生かされてゐるやうに私には見られる。

園は水で過ぐすあけく水厩舎をさへ吾家とよびて予ら怪まず

と、氏の歌にもある通り、矢尾氏も戦争が始まるとともに他の同胞と同じ運命を辿り、あちこちの収容所に送られて、いろいろの目に遭つてゐるが、それを一つひとつの歌にしつつ歌をまもりつづけてきた。そして最後に親子四人でツリリレーキに隔離されて來、私も此處で初めて矢尾氏に接する機會を得たわけであるが、最近の氏の作品は特に光つてゐると思ふ。

世界大戦によつて巻き起された大きい動搖のあふりを食つて、妻と二人の子供と荷物をかかへてよろめき乍ら、タンホランからトバズの沙漠まで押しながされてゐるが、その動搖のなかで、いろいろと個人的な事情に迷はされて見失ひ易い非常時に對處する理念を氏はしつかりと掴みとつて、思想的に自己の位置をはつきりさせた。それは矢尾氏が自分の全身で切りとつた立場にであつて、その立場は氏の歌の内容をこれまでの比較的『働さかけられる』ものから『働さかける』ものに少しづつ移動させてゐる傾向が見られる。

矢尾氏は日頃私の歌の鑑賞眼を甘いといつて敬遠してゐるが、私も自分の甘さを認める。泊良彦氏の『渦巻』が出、今度また矢尾氏の『歸鴈集』

が出たので私も大いに勉強させて貰ふことが出来る。

今日はまた酷い風で、いつ止むともなく砂塵がまき上げられては走つてゐる。吹き飛ぶ砂塵のなかで、立ち並ぶバラックが薄れて見える。

このキャンプで果して水だけの人が短歌に関心をもつてゐるだらうか、不圖私はそんなことを考へながら、茫としたキャンプの風景が詰まつてゐる私の眼をこすつて、もう一度美しい「歸鴈集」をとり上げて必じみと見ている。

(三月十八日)

加川文一氏著

隨筆集「我が見し類」(百廿二頁) 近刊

第八号「鐵柵」にて上記の通り加川君の著書近刊が予告され、その豫約を募集してゐる。収むるところ、詩十四篇、隨筆二十一篇よりなるもの。今迄に発表されたものも未発表のものより成るいはば氏の詩文選集である。

加川氏の詩は私が今更贅言を附するまでもなく、独特の地歩を占むるものたること普く認むるところであり、その隨筆にも詩人の願想の中に靜かに而してゆたかに進ぶるものあり、それがふくよかに文にあらはれてゐる。申込は鉄柵社(二〇〇丁)へ、但し高松会員には私より取次いでよい。右送料共六拾五仙の由、大方の御清讀をお勧めする。(泊良彦 筆)

東歌に就て

加藤 肇 著

萬葉は故國歌壇ではすでに研究し盡され紹介されつくしてゐるので、高原一部の方は既に御承知の事と思ふが、今ここに私自身の勉強の爲めと一つは新しい人たちのために、何かの参考になれば幸だと思つて、これを執る事にする。研究資料に乏しいここでは手許にある僅か二三冊の参考書に依るに過ぎず、先づ卷十四の東歌あづうたの中から少し挙げて見たいと思ふ。

大方は御承知のやうに、東歌はそのかみの東地方人の――即ち今や関東地方の歌を集めたものである。今では帝都所在地たる関東地方もその頃は京を遙かに離れた僻遠の地であつた。従つて東歌はその所謂田舎地帯の方言訛語を以て歌はれてゐるところに特色あるものとされてゐる。それらの方言訛語の駆使によつて地方人の純朴素直な氣風が明瞭に表現されてゐるのを見る。

○筑波嶺に雪かも降るか否きかもかなしき見らばに、か干さるか(園史筆者)も
疑降るか降るか、にぬは布、干さるは干せる。

一首の中にか、むといふ感動詞(多少の疑問を含める)三つも使用してゐる

らそ水がわざとらしくひびかない。

○^{かたけ}毛野佐野の舟橋とり放し親はさく水ど吾^あけさかるがへ

註、吾はさかるがへ、^ハ吾水離^ハらめや、即反語。

○あずべから駒のゆこのすあやはども人妻児ろをまゆかせらふも

註、あずべー岸崩邊、ゆこのすー行く如く、あやはどもー危ふけれども、

まゆかせらふもーを長塚節は(可愛ゆく思ふ)といつてゐるが古義には

ま行かせらふも、とある。行かずにけわう水ないの意か？

こ水らの歌は東語が最も効果的に活躍した例であつてそのために一首の

調子が重厚素朴の気を帯びてゐる事がわかる。節は夫の「東歌餘談」の中

に「こ水を普通の歌語に直して見たところで原作には及びもつかない」と

言つてゐるが肯か水のことである。

○金戸田を荒掃きまゆみ日がと水ば雨を待といかず君をと待とも

註、まゆみー土乾裂水、と水ばー照れば、待といのすー待つ如く、

君をと待ともー君をし待つも、

この歌は單に戀人を待ちあぐんだ氣持を詠んだものであらうが、上句の

比喩が地方人でなければ捉へ得ぬ境地である。又、と音の重複による一首

の聲調に注意すべきであらう。

○^{とや}鳥の野にをさぎねいはりをささる寝なへ兒ゆゑに母にころばへ

註、をさぎね、いはり、兔を窺ひ、こらば、へー叱られた。

「息」の野に兔を窺ふやうにわが眼をつけてゐる兔ながらまだ専ら親しんだ事もないのに、その兎の母に叱られ、逢ふ事も出来ずにすごすごと歸るとよしといふ意だといふが、その野趣を帯びた比喻に、そのうすあふれてゐる。〇麻苧らを麻苧にふすさに績まざとも明日來せざめやいざせ小床に註、ふすさにしたくさんに、來せざめや、來ざらめや

明日は来るであらうかと悪人の事を思ひ乍ら薄暗い燈火の下に麻を紡ぐ手にもぐり勝ちな若い女の姿が髻髻と浮んで来る。私はこの歌を讀むと幼い頃夜なべに麻苧を前に丹念に麻や苧を紡いでゐた祖妣を思ひ出す。此の風習は地方では明治の半ば末期までも續いてゐた。

〇この川に朝菜洗ふ女、子汝も吾もよちをぞもてゐいで子賜ばい、に註、よち、同年輩、賜ばい、に、たまひね。

最初これを読んだ時には、朝川に白い脛もあらはに菜を洗つてゐる乙女を想像し、その縁談と思つたのだが、後佐佐木先生の註釈を讀むと菜を洗つてゐるのはその母親だといふ。さういへば、三句の汝もは母で同じ年頃の子と詠しかけてゐるのがわかる。田園の素朴な風景である。以上東歌二百廿一首の中から僅々数首を引いたに過ぎないがこれでも東歌の如何なるものなるか、略々判るであらう。

(一九四五年四月六)

高原詠草

二

三保周策

○
出迎への人らにそひて驛出れば連る灯光に夜霧なつさふ（コロムバス市にて）
雪重みと松の垂り枝の下蔭に艾の針芽付けや萌えいでぬ
張つめし小川の氷おもむちにとけで流水入るあをあをし大河に
溜池端の太藺の枯葉雪に居る木の間渡る陽に映えあたりけり
野良川のうねりに沿へる冬木立とびとびに見ゆ朝霧の中に

冬雑詠

大平澄治

をち方に日の落ちゆけばにはかにも森たそが水て木枯びびく
に眞夜深く胃痛にさめしわが面にまどかなる月照り冴えにけり
朝餉へと向ふちまた路なほともる軒燈に白々と霜牙えてをり
秋霧の深くとざせる朝の森やま鳩こもり啼く音透り来

南國のここにしも降る大震つものともなく且つ消えてゆく（アーカンソー）
隈もなく澄む中空に月冴ゆる今宵蛙のこゑ流水来も（二月某日）

春雑詠

中村ます子

何時咲きて散りけむ花かうちつづく並樹の下に踏みつつぞ行く

ここだくも散れる花房あやしみて夜道に屈み手に取りて見つ

沖繩に上陸すとふアヲニスさやには了解かぬ胸衝かれたり(三二五夜)

同胞の住みつく國が戦場になる日恐れて夜を寝られず

娘のために春着は縫へど度ましく生きむとちかふまきびしき時代を

歌日誌より

山本徳之助

雪解けてみればさぶしき吾庭か風のまにまに物屑散りばふ(二二五)

日光の温みありとしも思へぬ浅春に庭の紫陽花は早や芽ぐみつつ(三二六)

満月は東より照らし太白星西にきらめく今宵の晴れはや(三二六)

棘多き皂莢の枝に栖む栗鼠の日々の生活もわかれ見にけり

凡庸の吾れ六十に近うして家の周りに初の果樹植う

○ 阿部たみ子

とつとつと子をさとしすす夫の聲聞きつつ我の胸迫りきぬ

子等寄りてパパイン炊るらしコンコン燃ゆる音に交りてさざめき聞こゆ

ふと氣づく静かになりし嬰兒の視線壁額の赤き花にあるらし

日昏れぬればなすこともなく征きたる子への想ひ堪へ難からむ

オリオン座を質問めるわれに圖を引きて教へます君の言のゆたかさ(山本氏)

○ 林田美都枝

さ度べの杏の蕾は霜に遭ひ開きもあへず地にこぼれぬ

陽は差せどなほ降りやまぬ雪の間を小鳥は土におりて遊べり
雪解けの水の流みに泛く泡のしばし渦なし圓をぬがけり
家借りて棲むは同じき敵國人われ沿岸歸還に胸はおどらず
何日果てむみいくさ故に逢ふ日わかぬ故國の母を思へば寂し

登山

貴家しま子

圓けろろ身の行き所なくおのづから山にし遊ぶ人ら多しも
朽し果てし幹のまゐなる化石あまたまうべる澤に朽つてくだる
山坂を急き降り來て止まらむとすれど勢ふ足とどまらず
痛き足かうくも運ぶ歸り路は戦ふ兵の身を思想ひぬ

アメリカに市民の子らを育くみし同胞の悩みいよと大なり

子の歸りおそさをなじり打ちひしぐ音は夜更けの隣室ゆひびく

病院勤務

柳本 錦子

二十九の若さに子宮癌を病む女のころ思ほゆ洗滌ひやりつつ
骸骨に衣被せし如く瘦せし病人呼吸は保てりいく日の命かし

文毎に出所うながすわが娘親の立場の判かぬものかも

収容所閉鎖せまれば路頭にし迷ふ親かといらたつか娘は

○

鈴木 緑松

時代を劃るこの大戦に武士は命捧げて貫かむとす

畑の面に赤蟻塚はま陽うけて虫入り忙しく餌を運ぶ蟻

水引けげ子連水の蟻は畔の上にかさなりつどふこの寒き日に

畑に引く水の嵩みに蟻よれる土塊とけてこぼれゆく蟻

引く水は畔に溢れて蟻の群藻屑に纏り流水漂ふ

○ 霜時文子

平眼を送り返して吾子やつみに遠く海渡り出て征きにけむ

やんはり足をはしてしづしづと蜘蛛は寄り来る憂杭く我に

春光のぬくみは土穴に徹りけむ赤蟻出でてのうのろ歩く

春嵐昨日も今日も砂塵捲きて灰の柳の新芽もみある

病床吟 高橋東民

病むわれに春なほ寒き窓ぎけに葵は伸びて陽をさへぎらむとす

吹きつぎし疾風も今宵静まりつ闇に狂女の罵るこゑす

空の外に春の光の著るけ水や病友うこのごろさざめきあへり

○ 大園晴子

雨あら水雲と化りし立退の旅路は今も忘水がてなくに

眼向ひの丘に立ちたる虹の輪を趁ひて見知らぬ野を越え行きぬ

見も知らぬ野山を行けばアモンズの花盛りなり櫻かと見し

野田 勇 章

うすぐうくたなびく雲に紅^{あか}さして旭昇れり砂原の遠^{とほ}に

轉^ま位に歸還に遠く別るとも再び君と逢^あはむとぞ希ふ

今は亡き親しき友の願ひなりわが身にかけて君をまもらむ

松浦 清 子

戦すまば疾^{はや}く歸^{かへ}國らむといきごみて語りし翁もろくもはてにし

黒人と言通はねど我孫は仲よく遊^{あそ}ぶと初便り來ぬ

未の世は争鬭つづくとのたまひ聖^{せい}人のみ言今ぞ身に沁む

若人け外に出^でてゆさて老母^{はは}残る家に切干の大振揺^ゆげり

矢 形 溪 山

空暗く雪降りかかる十字路を素腰の女ら大股^{おほまた}に行く

生き残る友より多き亡き敷を夜半に目さめて遙^い想^はつさせず

ひとり居の母を慰^{なぐさ}めるむと兵の子は憎^{にく}みけるうしろ假名の綴^{つづ}りに

東雲^{とうぐも}の空に枝交ふ街路樹の葉^は散^ちれて青^{あお}をばはらむ

西 村 津 矢 子

見をさめの心ならむかい征く青^{あお}平^{へい}は山の斑雪にしはし視入^{しり}りつ

物音の絶えて久しき部屋中の静寂^{しじやく}にひびく時計の音かも

かすかにも風吹くならむ望^{のぞ}月^づの空に立つ煙散^ちうでなびかふ

ひたむきなものに凝りては昂ぶれる性の寂しさは吾といとへり
道沿ひに紅みさしたる柳枝の芽ぐむ兆しの一簇を見つ

吉田晴江

ふるさとは今由々しかる非常時ぞ思へば夜すがら眠りも得せず
國思ひいねがてにつつうとうとと待つ曉のおそきを思ふ

ひとり身の老いてあはれやよぼよぼと雲ふる中をコール運べる
人の難を己れの幸と白人はわが所有物踏み奪うむとす(旧地に残せる不動産に
つて白人と争議まじり)

雑詠

星加賀 富久

どよもし吹く風寒き野にしばし立ちて嚴しく聳ゆる山を見てわつ(戦場途上)
慰さるもの絶えてなき視界のけてに朝陽映ゆる山わが眼凝らしむ
昨日しも春めく感ひに和みしが朝戸開く水げ雪積もりをり

佐藤不二子

路の上のくぼくに溜る雪解氷晝は交々小鳥浴びわつ
大戦の紀念とのらす師の歌集一首ひとつに心打たれつ
夜の部屋に重々とひびく汽車の音車の聯結の長きそぞ思ふ
紐育と往來の汽車の繁くして戦車を積める貨車つらなれり
冬お遠きてあらはに見ゆる隣家白人夫婦が洗濯干しをり

安井 静女

フドリーパー関^{かん}松^{まつ}きし夫^そを敵^{てき}と認^みて三年^{さんねん}釈^{しゃく}放^{はつ}さぬ源^{げん}を叙^きしむ

兵の子を出迎へし父は涙して顔そむけつつ手を握りをり(所見)

早春

大場 眞 弓

畦^し踏^{ふみ}の限りただ枯原に見ゆれども窓の下邊には草萌^{もえ}え出でぬ

吾が夫は今年もここに住まふ氣か前の小畑に種蒔^{まき}きてをり

その病人には嫌^{きら}まれ聞病の月日まけ長く苦しむ人等か(隔離病室勤務)
を瘦^{やせ}せにやせて透き通る如^{ごと}く体をばあはれみにつつ湯浴みさせたり

臨終の近きを知るかねもごろにをどめは謝^{あやま}辞^ををわれにのべたり(こゝの死)
温^ぬきスーパを簀^すもて飲ますれば死相ながらにほほえみにけり

越後 桂子

人の衣^{きぬ}ひたすら縫^{ぬい}かと氣負^{きお}ふわれ時に言葉さへさびしくなりつ
忙^{いそ}しく人の衣縫^{ぬい}か母^{はは}わかれ予^{われ}らにもうとき日のつづくなり

うつそみも細^こりて寂^{さび}しく堪^たへませど君が歎^{なげ}きは何時の日はれむ
みまかりし友のみ命^{いのち}なげかへば若^{わか}きわが身に觸^ふれて思^{おも}はゆ

秋の墓参

中川 末子

幾年を経^へなば茂^{さか}らむ奥津城の榆の若木は影の乏^なしき

とこしへにここに眠るかやや高く盛^{さか}られし土に秋陽は泌^{しみ}みぬ
同胞の散^ちり去^さり行^いかばかへりみむ人のあるなきこの奥津城か

夜となれば鬼の来り遊ぶとふ奥津城どころ青草もなく

雜詠

足田桂子

出所をし強ひらるる時同胞の慮げらるる聲相つげり

丘のべにはだれはのこれメドラークさへるさけば春は来にけり

と退まで夫も管みしなりはひと家具店に入りぬ心をぞろに(町に出でし時)

わが夫も思ひ深からむしみじみと商品に視入れる瞳澄みてをり

首すくめ胸も逆立て迫り来るルースターに村へげ眼のけけしさよ

○

小野喜美子

たまきはる命迫りしその際に戦地のみ子を夫にたのみしと(故保刈夫人)

さやかに陽は照れれども草蔭の小径の霜はひすがら解けず

春の雪なほはいたるせる庭隈に土押し上げて菊の芽萌えぬ

遠方に野雲雀の鳴くせー判原ひとり歩めり春陽あみつ

○

濱田ハナ子

春陽させば荒れしままなるさ庭べに菊の芽生へもしるさこの頃

堀河は夕光に映えて一ところ眼に沁みるまで赤く染みたり

室ぬちにこもるに惜しく外に出れば一つの蝶の飛び去りにけり

○

山田立枝

いまだ見ぬ友にしあ水ど残されし君がみ歌を誦みつつ嘆かゆ

秀れたる歌友の一人を逝かしめしわが師の嘆きさながら思ほゆ
 辞世の歌遺せしといふかおんいまは知らして安らに逝きたまひけむ

○

赤星 さと

ビブニヤの鉢を食卓の真中に据ゑうから圓居して夕餉を食すも
 目さむ水ばいづくが路かけた畑かわかずなるまで深雪つもりぬ
 今朝の雪温室の屋根にも降り積もりこの室内の花かげくらし

○

逸 名 氏

學舎を終へし我が子に贈る品需めはかねてただ約したり
 わが手紙はなして送る今にして子に盡す事の足らげざりと思ふ
 母秋のせつなる願ひにいさかひと時になりしが子は發つといふ

手術 前後

(遲着)

岩 月 靜 恵

こくこくと淨き血潮は我が体内に入りて鼓動の高まるおぼゆ
 現にて寢台車に乗れり氣をしかと持てよ友のみ聲は聞きつ
 生も死も念ふことなく麻酔剤を大きく嗅ぎ吸ひて眼つぶりぬ
 み名呼びて切にその手を握りたき思ひに堪へて歸り來たりし(中村郁子氏追憶)
 床並めて命の末を交々に語り合ひにし君は逝きましぬ

第八號 短評

泊 良 彦

○明日はゆかむ山の八谷のくまもおちず晴れて照らへり元日の午右を
初登山と題する永瀬君の一連八首中の第二首である。くまもおちずは「隈
も落さず、即ち隅々隈々までも餘さず」と云ふこと。これは元日の所詠とみ
るべきで、明日に対する期待を以て氣分の透つた明るい感じのする歌であ
り、歌調もそれに応じて伸びやかであり、こせこせしたところがない。こ
の前のもよく、序歌的作として共に注目された。

○堪へがたき痛み日に夜につぐといふ君をなげくに身ぬち汗ばむ
右は「郁子氏」と前書のある糸井氏の作であるが、その郁子もつひに永哀
に逝つてしまはれたと思つてこの作を読むと、結句の「身ぬち汗ばむ」に、病
苦に悩める歌友をうれひ餘命を氣遣へる感動が具象化されてゐる。唯上三
句がもう一步直接的だつたらと希求される。

○霽ごもる大雪明けの朝の道權引ける童があらけれにけり
加藤けるゑ氏作。大まかの採で一つの場面があらけ水てけゐる。七号の
牛を詠んだのも大体同じ觀方扱ひ方でおほうかさはあるが、もう一步こま
やかな觀照によつて小味を出すやうに努めたいと希求する。

○柵内の生計いふせく思ふとき蘇武が荒野の月日を思ふ

荻尾君の作、讀史によつた感懷がもとであるが、作者が自身の現在に引きつけて發想してゐるから普通詠史の作と異なる餘情を持つのである。つまりこの種のものけよく自身に消化してけじめのものになるのだと思ふ。

○渚べに波かかぶりしさながらに氷れる巖きびしく白し

鹿島氏作。純実生ともいふべきもので結句あたり今一步と思はれないでもないが、一首かなりに狀景は出してゐる。

○霽透す陽に白じうと流れ氷の稜見え之の下う光るともなし

尾川氏作。これはその居住地よりして湖面の所見であらうが、一首の上に湖なり河なりの狀景が何か織り込まれてゐないのは玉に瑕ともいへよう。上記の事を他にしては隙のないあらはし方であり、結句がいと思ふ。

○上雲雀ひたぶる羽根に天つ日の光砕くる冬の空蒼し、野村君作、

二句から四句までよく觀よく現はしてゐる。唯結句の句法にいさゝかの問題があらう。あゝは上句に対して倒格的敘法によつた方が確かとなる。

高原詠草

砂堤

矢尾 嘉夫

風避けて砂堤の下に陽浴みをり時折砂のくづる音す

水涸れし堀の底ひに日あたれり乾割れし土に藨草青みぬ

先刻まで童ら遊べりし砂なだり夕陽にしるく足跡みだれたり

夕照れるシヤスタ嶺ありて砂堤の上に佇ちし人影點々をなす

風の後波なす砂面の襲々に夕騎ふかみ冷えゆきにけり

風絶えてしづもるひととき吹き曝れし路面あらはに浸り陽明りぬ

淡雪はいたく明るく降りおた水下萌ゆる土をうるほして霽る

浅春のころ

綾織 謙介

碧じろく山稜澄みて明けそめしアバロニ山の黝きしつけさ

部屋仲間午後のひと時を黙深し寂しくもあるか雪荒水の日を

春雪は夜のまにふりて暁のキャンパス近く箱子來啼くも

ただ一こゑ雄啼きてやみし山裾は未だ小暗き暁のしづけさ

まきびしき沖縄戦のさなかにし内閣更るときくが由々しさ(四月五日)

○

山内 曾六

小夜更けて子の讀む聲の止みし時白湯の沸く音耳にかそけし

雨後のさ度いまだつこのまひるたんぽぽいつか青芽吹きたり(二月某日)

由々しかるみ代の動きに聞けらぬ吾とし思ひ日々を慎しむ

幼児の今宵つねなくむづかるを怪しみ見れば乳齒二つ見ゆ

雜詠

村上正男

物食めば髯の動くを見て笑ふ幼児の頭わが撫でにけり

荒原は雲におほはれしあかときに出で立ちて祈る心清しも

夜のまに積もりけむ春雪の思ひさや開けし戸の上ゆ散りかかるなり(四月八日)
故國戀ひて明けくらすときたまはりし歌集「歸鷹集」を樂しむ讀めり

○

哨兵の銃は短かく重げなり装填したる實彈を思ふ

豊福昌範

百姓が性に適へりとかへりみぬ吾が身の上を母は寂しむ

新聞紙ひらげし上に現る身の赤き血潮がしたたりやまず

あなかしこ吾が掘りて來し春の野の薊を母は食べたまふなり
種蒔きをへて陽炎へる畑を二分けて水は豊かに流水ゆくなり

早春

宮村一雄

草の芽の青さがかなし石原の小石つづりて萌え出でにけり

齒のうづき止めて程なきこの曉の窓にかかりし月の親しさ

荒みたる心かなしも自らを人に従ひひそかに生きむ

拙なさけ自ら知れぬわが歌を一生をかけてはぐくみとほさむ

○

沖宮求香

ひとりなる母にも仕へ得ず一人子の拘はれ行きし友ぞ惚けゆ
父拘かれ母に甘ゆる子供等の素直に六月つや思ひやうるる
年老けて人の子弟教ふるも重責なり血洗ひし一つ平紅待たむ
約束の鍼醫に逢ひえず痛む足引きずり歸る吹雪の中を

吉松博志

消燈せし室に今夜も月光差して眠れぬままにものぞ思ほゆ
鉄柵の向うに柔かき陽の光浴みて枯草食み居る牛の群あり
裸水を鳴らす吹雪の音やまず夜更け眼さめてもの思はるる
日もすがら降り降れる粉雪を庭上にはの白く春の日は春るる

吉田きみ子

眞白くも霜おく屋根にうづくまり震へる如く鳩は鳴くなり
拘引かれたる父を父を彼方と指す子らの硬匙なくしてわが眼熱し
荒みたる心慰さふと活けし花埃多き部屋に据ゑて息つく
埃多き部屋を清めて活花飾り瘦れし夫の歸るを待てり

西居登美子

子等二人一つ臥床にまろびぬしこの假住みの室の貧しさ
香りよきシガールの白ひたたもへり夜更けて夫は物書きをます
眠られぬ夜のつづけられば憤り忘れはてむと合掌すなり

おのづから心寂しくこもりゐて弱き性をばいとほしき居り

○ 山 本 志満子

粉雪の飛び舞ふまゝに片照りす夕陽光妖しく雲雲に映り(早春)

春眞晝ニヤスタの山嶺の眞白雪あを山脈の上に耀ふ
朝顔二本鉢に萌え出しがためしくて庭の日向にいたはりてをり
落ちつきて事をなさむと希ひあつ時[○]に昂ぶるを我と寂しむ

上 村 比呂子

柵外の某の花鳥黄にたけて夕露中に際明りせり

堀川に玩具船浮かべて競へる童ら流水に沿ひて走りゆきたり

監視人馬乗り入るる鳥遠く群れ立つ小鳥陽に耀へり

現實はかくもさびしきものにかも親と子まさしく敵としまつ

○ 山 本 雅子

病める身は咳き入りつづけ時計の音聞きつつひたに朝明け待ち居り

鳥影のかすめ過ぎたるほの白き窓に安らぎてまどろまむとす

龍巻を危く避けし鴉一羽あたただしくも羽そろへゆく

リンカーンの如き偉人があめりかに再び出でて國を救はざるか

三月の定念 川 崎 と み 子

春陽春の定念に紅さ並める骨董品にふく艶立てりひとつ一つが

棚の上の桃の造花をながめつつ明るしと思ふ今日の室内を

夜の一時勤めより歸りて入れる床に眠るを惜しまし本讀む

病み人らに親しみがたき心もて勤めつづくるは甲斐なく思はゆ

わが一生に關はり深く思ひ見て湧ける不安を下愧ぢにけり（市民権離脱）

○

渡邊 あい子

墨うすく水葵の葉かかむとし机にむかひて息ひそめあつ

張間より砂塵吹き入りてすべもなし窓際の兒らを片寄らしめつ（幼稚園）

一年餘あそびし園兒らのたけ伸びて一年生となる日近づきぬ

ツラツラの行き交ひしげきこの園庭に兒らとあそびつつ心もとなき

日曜日と思ふ安けさに目覺めぬて今朝の鴉の群れ鳴くを聞く

再起

仁 熊 登美子

いたづらに病み經し吾れが再起さむとして心に得たるものの乏しさ

他人の血をもてあがなひし吾が生ぞおろそかならぬ責務し思はゆ

病床にゐて讀むより外に用のなき身は落着きて詩書に親しむ

長病より起ちて歩むと繼りつつしみみ夫に頼る心なり

火の玉となりて戦ふ祖國人の無我の心を病床に思ふ

年たけてち錢を思へば好む画を一生描きたる幸は持たしき（命日に）

某所新見

泊良彦

人の生の終りに近き人々が賭けに夢中なるも観おとしがたし

紙^き少^さきが来て眼^め守^もれどもかかはりなく花札叩きをりあの手この手が

札^は遊びをあめりかの社交とかんたんに言へりし人を心はなみす

ばくちなど肯ふにあらず然れども大義忘れしになほしまさるか

日蔭にし阜^ふを移して花札引ける群は見しのみ歸りて物書く(夏旦)^し

まべ積みし雪にけしきだつアバロニ山なほ暗き空に映り上げにけり(冬あふりに
雪あはれ時)

次つぎに蒸^も氣^きは雪より立ち流れ解けてくろき道^{みち}匍^はひもとほろふ
手電を打ちて出でたる曲り角^{かど}春^{はる}光^{ひかり}に鱗^{うろこ}かこぼれて光る

ハート山支部第九回歌會詠草

賜^{たま}ひたる歌集讀^よみついで深き師のみ心に觸れて思ほゆ 西村津矢子

いつづべにか移り住むべき険しかる外に出づる日を思ひわづらふ梅本静恵

新近^{しんじん}の雉^{けい}の聲聞^{こゑきこ}くわが家の静けき生^{なま}活^{かつ}ひたに恋しも 仁科信子

旅^{りょ}圖^とこぞりやゆしき時に打ち向ふ今とし思へば夜を寝ねえず吉田晴江

結^{むす}衣^えのきき守^もる吾^{われ}娘^{むすめ}は雪寒^{ゆきさむ}き夕べを重きコール運べる 上田せい子

今^{いま}は行く子の背^せ後^ごより外套^{がいとう}に附^つく糸^{いと}屑^{くず}を拂^はひてやりつ(子出所) 加藤はるゑ

前号 拾五首抄(十五氏一首) 加藤はるゑ

夜の明けに満月は黄色増し、特さして煙る屋並の際に低まる

・泊氏

寂かなる日差しの庭に枯芝は立ち直りつつ斑雲浮けたり

・矢尾氏

朝日さし闌けて静けき冬木原一つの鳥の聲澄み透る

・永瀬氏

退去撤廃自由帰還とひびよく聞きたる後に重くこたはる

・糸井氏

柵の生計いふせく思ふ時蘆武が荒野の月日を思ふ

・萩尾氏

渚べに波かかぶりしさながらに氷れる巖さびしく白し

・鹿尾氏

波のむた盛り上りたる流水氷のひとつなりや須臾きうめきつ

・尾川氏

鴨泛ぶ枯原が中の青淀は小波たちて光はらうぐ

・児玉氏

上雲雀ひたぶる羽根に天つ日の光碎くる冬の空蒼し

・野村氏

木の槌に觸る水は籠る水喰ひ虫水を喰ふ音のしばしやみたる

・貴冢氏

へりくだる心しなぐばいさかひは絶ゆるとさながらむ絶えざるものか

・柏木氏

常の日はおやつぬだりし子供らもものしづかなりかなしきまでに

・上田氏

モデルわれ姿勢をとる間をひたすらに美しきことの思ひみむとす

・原氏

待ち設けしものの如くに歸る家か木箱の薄木枯芝に白し

・田名氏

人類の動乱の渦中にとび込みて眞剣に生きたしと思ふことあり

・山本氏

ゲラナダ短歌會卯月抄 木村 本田 鶴子

今日の日の仕事を終へて常の如^{ごと}くまじれる唾吐きにけり
 體裁^{ていざい}けりし消防署員を辞してより心安けく區の風呂焚^{たき}きす
 待ちゐたる戦線よりの第一信受けし嬉しさただこみ上げぬ
 野焼する里のあるらし夕風を廣野の涯に煙たつ見ゆ
 うらうなる日和つづきの陽を受けて草の若芽は地を割りて生ふ
 ロッキ一の冬と思へぬ暖かさ松の林に今日も來にけり
 佛青の朝の祈りに息け詣り心安けく歌集をひらく
 わが留守を友の訪ひしか灰皿にまだ立ち昇る煙草のせむり
 所狭く並べ立てたる本の土に砂塵吹き込み隙なく積もる
 女童ら踵の高き靴はきてよりこび歩む姿あぶなし
 みどり菫の芽吹さが樂し朝々を捨て水しつつかふぎみる木の
 天霧ふ冬日の畑に陽の在^ある所仰ぎて時刻を計らむとする
 ビンブーを遊^{あそ}びし跡のこぼれ土踏まれし土をわりて芽を出す
 雨と降り雲はかへり降りつぎて春の淡雪を積もりつ
 ひとしさり身の上語りて汽車窓に凭りし娘はるぬむりそめつ

・原 哀叫
 ・川脇無一
 ・奥田勢津子
 ・戸國畔蹠
 ・西尾木星
 ・加藤勇治
 ・木村はる
 ・山内政江
 ・平井静子
 ・大寺 望
 ・久須美とみ
 ・税所都霧
 ・桐原李村
 ・畑 夢夕浪
 ・木村本田鶴子

編輯後記

泊良彦

かねて餘命不安にいれてゐた中村郁子氏が三月二日遂に不歸の客となつたので重ねて追悼号を発行して久しき歌友の冥福を祈ることにした。早くより氣にかけてゐたが四月は少々身具合が思はしからず、爲にこの追悼号を遅れさして済まなかつた。追悼号の故に、寄せられし追悼歌は会員以外のもの一首づつは載せたことを念のために附記しておく。

先月発行の現代秀歌選集は期日過ぎてからの申込も相当にあつたが、何分用紙不足にて希望者全部のお需めに応じ兼ねた次第である。該書中校正浅れがあるからたの如くどうか訂正しておいて下さい。

一五頁二首目四句、身は舟(正)。三九頁三首目上欄、御の下に、禮申す、と五字脱
四〇頁最後の歌四句解は觸(正)、九〇頁二首目上欄、そにけそぞろに(正)、
一〇〇頁二首目一句、つややか、つや、以上、の如く訂正。

前号記載の高原選抄への各三十首送稿は、本号遂刊に付、その締切を五月廿日迄延期しますから本集に自詠を収めたい方は期日迄に届く様にされたく、必ず前号の当該記事に順據して下さる様、この本も用紙の都合ある故、若し本集に出詠せざる方で歌集希望者は必ず五月末日迄にハカキにて申込まれ度又出詠者で若し一部以上希望の方も同様にハカキで(当方便宜上)申込まれたい。

六月には高原十号の仕事ある故、上記歌集の出来上るのは七月中旬以後と豫想す。なほこの出費は不明に付前金を送らぬ様にされたい。まちなちにやつては間違ひを生ずる恐れがある。當所も来年一月より司法省管下に移さるることに決定の由、實際上の取扱ひが如何に度化するか豫想の限りでないが、小生に餘力あらば、相當の度化を豫想の下に、上記選歌集の他に更に何かをしたいつもりでゐます。

本号は追悼の歌文に二十教員を費したため、時日の都合上或文は次号にまはすの已むなきに至つた。追悼号も三度迄で恰度都合が合ふといふものの、この後皆自愛されて治氣ある歌を寄せられたい。

当地は五月に入るや急に暑く

殆んど昨夏と同じき温度となつてゐるが、まだこの反動が来てまた霜雪を見ないとも限るまい。氣候の不順は奥地高原の常であるから諸友の自愛を祈る。
第拾号原稿五月卅一日 締切。

昭和二十年五月一日發行

短歌雜誌

高原

非賣品・隔月刊

維持會費三圓壹弗

編輯責任 泊良彦

Y・L・L・E・K・N・O・O・H・A・N・I